
心のゆくえ

JJ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心のゆくえ

【Nコード】

N3390Y

【作者名】

JJ

【あらすじ】

ある研究所で造られた目覚めない体。それを目覚めさせるため研究員がとった行動は？
救い出された彼（彼女）の生活を楽しくも悲しくも、つつつていきます？

タイトルとジャンルを変更しました。（変更前：M e n t a l
c a p a c i t y ）

e p 1・目覚め（前書き）

初投稿です。

ep1・目覚め

「……………うう……………」

ア……………がいた……………い……………。

——奥の方からドクンドクン、ズキンズキンと脈打つように……………。

イタ……………イ……………イタイ……………かあ……………さん、イ……………タイ
よう……………。

……………。

「……………うううっ……………」

「……………！」

小さなつめき声に気づき、そばにいた人影が驚く。

「……………イ……………タ……………いよ……………」

今度は、か細い声ながらハッキリと言葉となって聞こえてくる。

驚いた人影が慌てて声がした方へかけ寄り、多少動揺しつつもその状態の把握をはじめめる。

そして確認を終えると、静かに、しかし急いでその部屋から出て行った……………。

このことを少しでも早く知らせよう、と思うばかりに。

声の主は、病室のベッドに寝かされていた。

そこは一人で使うには多少広めの部屋に、ジェル状の素材によって作られた少し特殊なベッドと医療用の機器がいくつか並んでいて、その華奢というより痩せ細った体には、そこからいくつものチューブがつながれ痛々しいさまを見せている。

寝かされているのは、年の頃は10〜12才くらい？ ……………
の女の子であろうか？

顔色は寝たきりのせいなのか、もともと白いであろう肌は真っ白……
……というより青白いといったほうがよく、ほほもやせ細っている――
――が、その愛くるしい天使のような顔を貶めることできていない……………。

そして更に目立つのはその肌以上に真っ白な髪。
子供の姿に不釣り合いであろう白髪……………。

しかし、よくある年をとった人が、やがてなっていくであろう白髪とは一線を画す、くすみのない白――、白雪のようなキレイな色。

「……………うう……………ん……………」

またも、声がもれる……………。

しばらくして先ほど慌てて出ていった人影、看護師？の女性……
が、その病室に白衣をまとった男を、せかせるようにして連れ戻っ
てくる。

「ほんとなんです！ かすかではありますが、言葉……うわ言を……
……」

「この1年、いかに手を施しても目覚める兆候がまったくなかった
が……、今になってなど——、ほんとうなんだろっねえ？」
と、連れられてきた白衣の男、長身痩躯のひきしまった、それで
いてやさしげな顔の男……が、いぶかしげにしながらもやはり急い
で入ってくる。

そして、ベッドに向かい……

「！」

「ああっ！」

そこにはベッドの上の少女が、まだうつろではあるが……しかし、
しっかりと開いていた。

その真っ赤な、ルビーのような目を……。

e p 2・感涙

「先生！……………そ、蒼空^{そら}ちゃんが！」

「あ、ああ……………、こんな奇跡が……………」

病室に入って、今まで——まる１年以上眠って、目覚める気配、いや、身動き一つすらなかった……………、その少女が。

間違いなく目を開け、ほんとうにうつろでぼんやりと、ではあるが目を開けて……………。

先生と呼ばれた瘦身の医師は、そのまま少女の横たわるベッドへと向かいながら、言う。

「西森君、ご家族の方は？ 今日に来ていないのかい？ ……もしそうなら至急連絡してあげてくれ！」

「はい……………あ、いえ確か、ひな——お母さまが来ていたはずですよ。たぶん何かの用で少し離れただけかと……………、探してきます！」

「ああ、よろしく頼む。急いでな！」

西森と呼ばれた看護師が、少女を気にしながらも足早に病室から

出ていく。

医師は、それを見送ると再びベッドへ、少女のほうへと目を移しつつそちらへ向かう。

少女の目はそんな医師に気づいているのかどうか……、反応はまらない……。

かたわらまで寄った医師が、その手を少女の方へと伸ばしかける……。

「……………いた……………い……………」

また、少女がか細い声を出す。

医師は、伸ばしかけた手をそんな少女の頭にそつとやり、やさしくなでてあげる。

だが、それに対する反応は……………、まだない……………。

そしてやさしく声をかける。

「蒼空くん、蒼空くん……………、聞こえるかい？」

「…………………………」

ふたたび、今度はもう少し大きめの声で。

「蒼空くん!？」

蒼空と呼ばれる、まだ幼さの残る少女のまぶたが今度はかすかに動き……………

「……………う……………おかあ……………」
愛らしい唇から、言葉が漏れ出す。

だんだん少女の意識もはつきりしだしたのか、目も意思の光を帯びてきたかのよう……………。

医師がふたたび声をかけようとしたそのとき……………。

「蒼空っ！！」

病室に入るなり大きな声をあげた、細身で背の高めの女性が、少女のもとへ1秒でも早くとはかりに駆けよってくる。

その後ろから、看護師の西森も同じように駆けよる。

「ソラっ！……………蒼空くん！？」

また声をかける。かけるその声は、かすかに震えている。

「蒼空くん、お母さんよっ！……………わかるっ？」

その声を少女が聞いたとたん、……………大きな反応が現われる。

「……………お……………おかあ……………さ……………ん？」

言葉とともに、その目も動きを見せる。

呼びかけるその声の……………その声を出すお母さんの姿を探すため

に…………。

「蒼空！…………」

ふたたび呼びかける母親。

少女の目が、そのルビー色のキレイな目が、今度はしっかりとその声の方へ向く。

「そ…………蒼空……………」

声をかける母親の声はすでに涙声になっている。

「お…………おかあ…………さん？　おかあさん！？」

か細いながらも、とうとうしつかりした声で少女が呼びかける。

その目も、母親を見ようと輝きをます。

そんなかわいい我が子を、ようやく意識が戻ったかわいい子を、ついに我慢しきれなくなつたのかその両手でやさしく抱きしめる。

母親の、その優しい目からは涙があふれている。止め処もなく…

…………。

でもその涙は今までとは違う、暖かい涙。

少女が目覚めない間、我が子を想って泣いていたその涙とは違う

暖かい涙…………。

少女の目からも涙が流れている…………。

そしてその表情は、やわらかい安心した笑顔。

意識なく眠っていたときとは違うやさしい微笑み。

抱きしめていた体を離し、少女の顔を見つめて母親はこうささや

く…………。

「おかえりなさい……………」

ep3・感涙 2

なぜこんなにアタマが痛いのだろう？……………。

アタマの芯から、湧き上がってくるように痛みを感じる……………。

……………ズキンズキンと、脈打つように……………。

激痛というわけじゃあない。

でも、気にならないってことは、全然ない……………。
この痛みはいつたいいつから続いていたの？

……………そもそもいつから痛いと思つようになったの？

……………それすらわからない……………。

蒼空はいつ治まるともしれない痛みに悩ませ？られながら、いつしか茫洋とした思考の波にゆられ始めていた……………。

* * * * *

どれくらいのときが経ったのか、その想いがついにはその唇から

……………

ベッドで身動き一つとることなかった、その少女から……………
うめき……………更にはコトバとなって……………。

こぼれ出していく……かすかに、か細く、やさしい母親への
想いととも……。

「……………うっ……………」

「……………うっうっ……………」

「……………イタ……………いよ……………」

最初に出るのはやはり、アタマの痛みのこと……………。
そして――。

「……………う……………おかあ……………」

長いあいだ会っていないような……………声も聞いていないような
やさしい母親のこと……………。

それに合わせて蒼空の周りにも変化が起きていた。

……………蒼空の変化に気付いた、看護師や医師たちが――あき
らめの気持ちでいたその人々が……………。

意識を取り戻しつつある蒼空に向かって、つなぎとめるように……
また戻ってしまわないようにと声をかける。

そんな外の雰囲気は、蒼空は、目を開き様子確かめようところ
みる……………。

まだ朦朧とした、アタマの痛みも続いているなかで蒼空は懸命に
外へと意識を向ける……………。

その努力は報われる。

懐かしい、ずっと聞きたかった声。

「ソラっ！……………蒼空くん！？」
やさしい、お母さんの声。

うまく動かない口、”つかっていない”のど、で……………一生
懸命声を絞りだす。

「……………お……………おかあ……………さ……………ん？」

「蒼空！」

ふたたび母親が呼びかける。

その声に蒼空は確信を深め、その声の方へと注意を向ける……………
…声の主を見つけようとする。

「そ……蒼空……」

母親のその声は、もう涙に濡れている。

「お……おかあ……さん？　おかあさん!？」

蒼空はよりいっそう声を高め、そこにいるであろう母親に声をかけ、そのまだよく見えない目で見ようと見開く。

そしてとうとう、蒼空の頬に、その頭に、そして肩に……やさしい母親の手が差し出され、蒼空の体は包まれた。

蒼空は頭の痛さも忘れ、その母親のぬくもりに、そのやさしいやさしさに包まれ……

その目からは暖かい涙が流れ出す。

抱き寄せる母親も、そして抱かれる蒼空も……やさしい涙、そしてふたたび会えた喜びで満たされていく。

やがて抱擁をとき蒼空を見つめて母親は言った……。

「おかえりなさい……」

と……。

ep4・困惑

しばし母親は、蒼空を見つめている。

そして、指先でその愛らしい蒼空の、キレイな目、その目じりから流れ出た涙をそっとぬぐう。

蒼空もそんな母親をじっと見つめている。

その目は、すでに母親の姿を、そのやさしいお母さんの姿を余すことなく捉えている。

見つめる蒼空に、母親のその手がふたたびのび小さな頭をやさしくなでる。

蒼空は、気持ち良さそうに目を細める。

「蒼空……、本当に……目覚めてよかった!」

母親がふたたび声をかけ、やさしい笑顔を見せる。

蒼空も、その愛くるしい顔にまだぎこちないながらも、かすかに笑顔を浮かべながら……………。

「おかあ……………さん、……………お母さん!」

と声にだしうれしさを表現する。

そうしてなでてもらいながらも、蒼空はだんだん考えはじめていた。

目が覚め、頭痛はまだするものの頭がハッキリとしだし、どんど

んその考えが大きく占めるようになってくる。

蒼空は、まだまだ微妙にこわばる表情ながらも、その考えの答えをもとめ母親に問いかける。

「お母さん……お母さん？ ……ぼ、ボクっていつたい……………」

……なんでこんなところに……………なんでこんなに自由がきかない……………
……なんでこんなに……………。

そう、意識がハッキリとし母親になでられたことで、自分自身もお母さんにさわるうとした。のだがその意思とは裏腹に、…………自由のきかない体、…………顔を横に向けるのにも苦勞をするほどの。

…………何なのコレ？ ……自分のカラダじゃないみたい……………。

目覚めて間もない蒼空は、だんだんと自分のカラダへの違和感にじみ出てくる。

そんな蒼空の問いかけ、様子に母親は表情を曇らせる。

……先ほどのまでの笑顔がだんだん沈んだものへと変わっていく。

「柚月さん」

いままで後ろでひかえ沈黙を守っていた医師が母親に声をかける。

医師の方を見る母親。

それにうなずき、

「柚月さん、ここからは私のほうから蒼空くんにお話ししましょう？」

少しほっとしたような表情になる母親。

蒼空に問われたことを、自ら話すには自身もまだつらい……。たとえ１年以上の時が経っていたとしても……。

「お願いします……」

そう医師に伝えつつ軽く頭をさげる。

「それじゃ……」

と、医師は蒼空の寝るベッドへと近づく。

看護師の西森が、不安げに医師の顔を見るが、医師は気付かないそぶりで蒼空の方を見るて声をかける。

「やあ、蒼空くん……はじめまして！」

と医師は話かける。

蒼空もようやく医師に気付き、かすかに驚くがそれでも挨拶をかえず。

「はじめ……め……まして？……」

「うん……、私らにとってはホント言うといつも君のこと見ていたから、初めましてって感じじゃないんだけどネ。……まあ、君にとっては初めましてだ」

地がオシャベリなのか余計なことをいう……。

「私の名前は、イシワタ、石渡 徹っていうんだ……。君を担当している ” 脳神経外科 ” の医師だよ」
よろしくなど、微笑を蒼空へ向ける。

蒼空は、一瞬目を大きくしたが言葉を発することもなく石渡医師を見つめている。

肩をすくめつつ続ける……………。

「と、その前に蒼空君…………、今の体の具合はどんなもんかな？ 気持ち悪いとか…………ない？」

蒼空は、素直に頭が少しうずくように痛いことを告げ、でもガマンできないようなものでもないから…………と、話を促すように言う。

「そっか…………、頭が痛いねえ…………（意識が戻って脳の活動が活発になったから？ ……とかかな？） ……まあ…………いいでしょう」

石渡は、じゃあと言って再び話しはじめる。

「とりあえず君の体におこったことを端的に説明するよ…………。ホントは今すぐじゃなく君がもう少し落ち着いてからにしようと思っただけ…………な」

（石渡の中ではずっと担当してきたからか妙になれなれしい話し方である）

まあ、いいさという表情で話を始める。

母親は心持緊張を深め、蒼空の方を心配げに見やる。

どこからかゴクリとつばを飲み込む音がする……………。

（看護師の西森だった…………）

e p 4・困惑（後書き）

読んでくださる方々がみえるようでうれしいです、ありがとうございます。

そういうのってすごい励みになるものなんですネ。

書いてみて初めてわかった気がします。

e p 5 ・ 過去

「まず……、君の今おかれている状況なんだけど……」

といいながら、石渡はベッドの脇に座面のみある小さなイスを持つてきて座る。

その様子を見ながら、不安そうな顔を浮かべつつも話を聞こうとする蒼空。

「君は……1年と、えゝ5ヶ月ほど前？　になるかな、……事故にあっただ。覚えているかな？」

蒼空に質問したように聞こえたが……返事は期待していないのかそのまま続ける。

「その事故で君は、すごくひどい怪我を負ってしまっただね……、そのままではとても助からないほどの重症だったらしいんだ……」

蒼空はおとなしく、じつと聞き入っている……。

「私自身がその時、直接かわっていたわけではないけど……その当時、の関係者——が、ある方法で君の命を……もてあ……いや、助ける手段をもっていてね」

石渡は一瞬表情をゆがめ……すぐになにもなかったかのように話を続ける。

「で、その関係者…のもとで治療……を重ねた結果、君は一命をとりとめたんだが、さっきも言ったけど……、それは1年以上前の話なんだよね……」

色々話を端折っているような説明ぶりだが、蒼空はまだそこまで
はとも頭がまわらず、気付くこともない。

そんな蒼空の様子を見て、苦々しい表情をしながらも石渡はさらに続ける……。

「君は非常に難しい手術を受けたものの……、無事手術は成功した。……したんだけど、君の意識が戻ることはなく——色々、ホント色々、手は施されていたようなんだが……ね」

ここでもまた石渡は顔をしかめながら話している。

「その後、またひと……ゴホッ、色々あつて……病院も変わって、今私のいるここ……」国立医療研究中央病院” っていうんだけどね……ここに移ってきてからも可能な限りに治療を施していたんだが、力及ばずでね」
申し訳なさそうな表情を浮かべる石渡。

だけど、と続ける……

「ご家族のみなさんにもホント申し訳なかったんだけど……今こうやって、君は1年5ヶ月ぶりに……こうしてお母さんと……言葉を交わせるようになった！目を覚ましてくれた！」

そう言いながら、そっと手を伸ばし蒼空の頭をやさしくなでる。

蒼空は、びくつと一瞬身じろぎするが……蒼空なりに感謝しているのだろっ、おとなしくなでられている。

「君が今になって目を覚ましたのは何が原因なのか？はわからない……始めから時間が解決することだったのかもしれないし、今までの治療が遅まきながらも効果を現したのかもしれない……」

やるせない気持ちで話す石渡。

「あと、君は手術後ずっと目を覚まさず1年以上寝たきりだったからね……、体が動くことにそもそも慣れていない……。それに、例え……動く機能が完全となっていた……としても、筋力も衰えているからいずれにせよ動けないだろうし……ね」

今度は少々意味深な発言をする。

「ま、これから少しずつ体を慣らして、あせらずゆっくりとリハビリをすることだ。大丈夫、必ず普通の生活が出来るようになるし、私たちもその為なら誠心誠意、努力は惜しまないつもりだよ！」

下がったところにいる西森もうんうんと、一人うなずいている。

そして石渡は、ポンつと蒼空の頭を軽くたたき、これで話はおしまいというように、イスから腰を上げる。

蒼空はまだまだ聞きたいことは、たくさんあるのにつ……という風に石渡の方をぎこちなく見上げるが……。

「今日はもうこれくらにしようかな？　まだ目が覚めたばかりだと

いうのに……、無理してはいけないよ。これから色々検査もしなくちゃいけないし……、君自身もいろいろと……ネ！」

石渡の調子がまた軽くなってきた。

「は、はい……」

残念だけど、蒼空自身まだ頭も痛いし……お母さんも気になるし……、と納得し返事をした。

まだまだ肝心なコトの説明が大きくぬけているのだが……今、蒼空にその話することは酷なことなのだろう……。

蒼空には、今しばらく母親と、目が覚めたばかりのこのひと時を……穏やかに過ごす時間が必要だろう……。

「じゃあ、私は一旦失礼させてもらうよ……、こう見えて結構忙しい身でねえ……」

軽く微笑みながら、

「西森君、あとのことはよろしく頼むよ？　蒼空君は目覚めたとはいえまだまだ安静が必要だしね」

「はい、わかりました。任せてください！」

胸をポンつとたたきながら石渡に答える。

うん、と西森にうなずきながら……石渡は、じゃあ、と蒼空に軽く手を振りながらベッドから離れ……

母親にいつものように声をかける。

「柚月さん……、ちよつと——」

入り口近くで手招きをする石渡に、母親が近づいていく。

そばに來た母親に石渡はいくぶん声を落として告げる。

「彼の姿のこと……ですが、……まだ目が覚めたばかりで彼自身、周りのことは見えてないし、自分のこともしかりでしょう……。今すぐそのことを彼にいうのはショックが大きすぎる……、と思いましたのでいいませんでした。それに事件――、のことについても……」

一旦言葉を切り、母親を見る。

そして続ける。

「このことは、明日あらためて私からいつてもいいし、あるいは……」

と、いいかけたところで母親がさえぎりながら言う。

「そのことは私から伝えます……。あの子にはゆっくり……おびえさせないよう、落ち着いて話してみようと……。そう思います」
母親は毅然とした表情で……。しっかりと石渡医師に告げる。

「そうですか……。何かあったときはいつでも相談してください。西森君も、もうしばらくは専属でつけますので、そちらもなんでも使ってやってください」

そう言いながら看護師の西森の方を見る。

笑顔を見せながらうなずく西森。

「ありがとうございます」

感謝の気持ちをこめお礼をする。

石渡医師、そして西森へと……………。

そして去りぎわに石渡がもう一言……………。

「明日からは忙しくなりますよ!？ 蒼空君の検査、今後のリハビリ、ご家族もいろいろあるでしょう? …… 蒼空くんの妹さん、彼女にも早く教えてあげなきゃ・ね? よろこびますよ、きっと」

最後の言葉を聞いて母親は満面のやさしい笑み……………を浮かべる。

「それじゃ!」

妙にさわやかな雰囲気を残しつつ、石渡は去って行くのだった……………。

e p 6 ・ 苦 悩

しばし石渡が出て行った方を、ぼーっと見ていた母親だったが、はっと我に返り蒼空を見やる。

蒼空は先ほどの話……を聞いて、ちょっと考えるこむそぶりをみせていたのだが……疲れたのだろうか？

まだ目覚めて間もないというのにいきなりの説明だったせいもあるのだろう……、すでにうとうとしだしている。

そんな蒼空のそばに静かに近寄り、かわいらしい頭をふたたびやさしくなでてあげる。

「うう……ん………」

気持ちよさそうな表情をみせる蒼空……そしてそれが、その安心感がさらに眠気を誘ったのか……、いつしか眠りにおちていく。

「日向さん」
ひなた

看護師の西森が母親に声をかける。

名前で呼びかけるあたり、二人はずいぶん気心が知れているのだろう……。

声をかけつつ近寄ってくる、西森。

「日向さん……、蒼空ちゃん目が覚めてホント……よかったです！」

そう言いながら母親の手をとる西森。

「ありがと……ありがとうね……香織ちゃん！！今までいっぱい助けてもらって……どれだけ感謝してもたりないくらいだわ……ホント、ありがとね……」

話しているうちにまた感極まってきたのか目が潤みだす。

「ううん……、そんなことないです！日向さんやご家族の苦勞に比べたら……私なんてほんと大したことしてないです」

手を振ってそんなことないと言う、西森。

そんな西森も目が涙でにじんでいる……。

母親……日向は、先ほどまで石渡が掛けていたイスにすわり、穏やかに眠る蒼空を見やる。

そして西森も、日向の横で同じように蒼空を見る。

二人の目はやさしく蒼空を見つめている。

しばらく感慨ぶかげに蒼空を見つめていた二人だったが……。

「蒼空ちゃん……、気付きますよね？」
西森がいう。

「そうよねえ……」

日向がちょっと困ったふうに答える。

さらに続けて、

「石渡先生には、さつき大見得きつていつちゃたけど……、やつぱり言いにくいわぁ……」

日向が悩ましい口調でいい、最後に　はぁ……と、ため息をつく。

「さつきはまだ目覚めたばかりだし、状況がつかめない状態だったから自分のことに気付く余裕もなかったでしょうけど……、今度起きたときには……やつぱぁ……」

うーん……と、考えながら話す西森。

「目が覚めたからには、食事もあるし、顔も洗わなきゃだし、更に体も拭いてあげないといけないし……、なによりお手洗い……の問題もありますし」

更に言う西森。

それを聞いて更に悩ましい顔になる日向。

「やつぱり早く伝えておかなきゃいけないわよね……え……」

「この話……を、聞いた時の蒼空の気持ちのこと考えると……」

と言いながら蒼空を見る……。

西森もつられて蒼空の方を見る。

つい半日前までの、身動きしない人形のようにであった蒼空と比べ

ると……まるで違う。

やわらかい雰囲気が出てきて、その白雪のような白い髪、透き通るような肌、かわいらしい顔は天使のよう……………。

と、二人は思う。

そんなかわいい、キレイな姿……人が見たら、みながつらやましが
るような女の子、なのではあるが……………。

蒼空は、男の子。

そう、あのいまましい事故、いや事件——までは、13才の男の子だった。

あれから1年以上たって、今は14才……、もうじき15才にもなるうかという年頃の男の子なのだ。

対して、今の姿は普通に小学生で通用する女の子、無理に見てもせいぜい6年生がいいところ。

それに、ひとつ下の妹の春奈が今13才……、外見では逆転してしまうのも悩ましい限り……………。

「ああ、もう！」

日向が顔を仰ぎつつ小さくもさげふ。

「蒼空が目を覚ましたら言うわ！ 先送りしていい問題でもないし、本人が気付く前にきっちり説明してあげるが家族の……、母親としての務めだわ」

開き直っていつ日向。

そして、

「私、春奈に蒼空のこと伝えなきゃ！ あの娘もずっと心を痛めていたんだもの……（それに一緒にいてもらえた方が私にも蒼空にもいいだろうし……）……よし」

「香織ちゃん、ちょっと携帯で連絡してくるから蒼空のことお願いできる？」

日向の決意にガンバレという表情を浮かべながら、

「はい！ まかせておいてください。それにベッド周りの整理ともありますから……」

気にせず行ってきてください…… と、言いつつ早速動きだす西森。

それを見て、それじゃお願いね…… と、日向は病室を出て行くのだった。

ep7・再会

……ん……。

……なんだかいい匂い……がするなあ……。

懐かしい……。

……いつの間にか……ふと湧き上がってきた想いととも……。
……。

そして今度は、心地よい……なんともいえない感覚が、ボクの
ココロを満たしてくる……。

ああ、暖かい気分……、気持ちいい……。

その感じ……は、ボクのアタマのほうから来ているみたいだ……
……ううん。

……だんだん覚醒してくる蒼空。

そこには静かに眠っている蒼空の頭を、やさしくなでている日向
がいる。

結局、蒼空は眠りこんでその日は目覚めず……、翌朝を迎えてい
た……。

日向は病室に入り、蒼空を見るとその愛らしいアタマをなでずに

はおられず……蒼空が目を覚まさないよう、やさしくなでていたりする。

「……う……う……」

蒼空のそのかわいい唇から、小さく声が漏れる。

「う……う……」

あら、と日向は軽くしまったという表情を見せる・・・が、すぐうれしそうに微笑み、蒼空を見る・・・なでる手はそのままに。

「お母さん？」

蒼空が問う……、昨日よりもその声はしっかりしているよう。

「はい、そうよ……蒼空、おはよう！」

「うん、……お……はよう？ ……今は朝なの？」

「ええ…朝、お天気もよくて気持ちのいい朝よお……」

ふーん、そうなんだあ……と蒼空はいいながらも外を確認することとは出来ないのあまり関心はもてない。

そして自分の頭をなでている日向に、さきほどの起きがけの感覚の答えを得、その心地よさに満足げに微笑む。

蒼空は、ふと軽く体を起こそうとしたが肩を浮かせるのがやっと

で、全然思っようにいかない。

その様子に、慌ててなでていた手を蒼空の肩にやり、

「そ、蒼空……まだ無理して動こうとしないで！？……あなたの体はずっと寝たきりだったんだから動くことに慣れていないのよ！」

「う……、うん………」

相変わらずの自分の体のふがいなさに……悲しくなってくる。

ボクの体……全然いうこときいてくれないや。まるでボクじゃないみたい……、声もなんだかちよつと違うし、これも事故のせいなのかなあ……。

さみしげに考えこむ蒼空に、日向は慌てて声をかける。

「そ、蒼空っ、それじゃちよつとベッドを起こしてあげるわ……、そうすればお話しもしやすいでしょ？」

そういつて、ベッドの背中部分を起こそうとベッド脇のリモコンをいじりだす……が、あれえ……と、頼りない声を出す。

どうやら使い方がわからないらしい。

蒼空はちよつとあきれたふうに……。

お母さん、変わらないなあ……、相変わらずのメカ音痴だ……と、思いながら”くすっ”と笑う。

そこにうまい具合に病室に入ってきた西森……と、もう一人。

そして日向の様子を見て察する。

「日向さん？私がやりますよ！？」

と、小走りにベッド脇にきてリモコンを日向から受け取り……

「体を起こしてあげたいんですね？　蒼空ちゃんちょっと動くから驚かないでね？」

操作とともに、寝床の上半身側が腰あたりを軸にせりあがり、そこが背もたれになる。

「はいできた」

「あ……、ありがとう………」

蒼空が看護師に感謝のことばを伝えると……

「うつ………」

いきなり動きが止まる西森。

いぶかしげに見る蒼空。

「そ……蒼空ちゃんが私に——、あ……ありがとう……って、言ってくれた！　コトバを向けてくれた！」

そう言いながらも感きわまって泣き出す西森。

「え？　なに？　……何なの??」

急に泣き出した看護師に蒼空があたふたしていると……

日向がやさしく蒼空の肩に手を置き、

「蒼空？……彼女はね。……あなたがこの病院に転院してきてからずっと、献身的に……、それはもう一生懸命お世話してくれてい

たのよ。……私たちもどれだけ彼女にはげまされたか」

動かない、目が覚めない蒼空をずっと世話してきて、そんな蒼空が目覚まし自分にコトバをかける……、軌跡が起こった……、そんな想いが、感情が、彼女を泣かせてしまったのだろう……。

「ごめんなさいね……、急に泣き出しちゃって」

と涙を指でぬぐいつつ蒼空を見る看護師……、まだちょっと涙声だ。

「私は看護師の西森……、西森 香織っていいです」
と自己紹介を始める西森。

「病院での蒼空ちゃん担当の看護師だから、何かあったらいつでも私にいつでもくださいね」

やさしく微笑みながら、かるくお辞儀する。

「よ……よろしくお願い……します……」
蒼空もあいさつをする。

それにまた西森が喜び、ニコニコしているのを見ながら……

かわいくてキレイな人だなあ……やさしそうだし、お母さんよりメカにも強そうだし（病院の人なんだから当たり前か……）……ふふ。

お母さんとも親しそうだ……。

そんなたわいもないことを考えつつ、起こしてもらって視界のよくなった周囲を何気に見渡そうと努力する。（まだ体が動かしずらくて大変なのだ……）

すぐもう一人の人影に気付く。

その人影、……ボクのまだたよりない記憶をたどると、でもすぐに
出てくる……………。

女の子は……ボクの見知っている女の子で……、ボクの記憶より
ちょっとだけ大人びてる。

……………いつもそばにいた——、女の子。

そう……………。

「は……………はる……………な?……………」

ボクがそう問いかけると……………

人影は、たまらず駆け寄ってくる。

そして、……………ボクのベッドへ……………、飛び込んできた!

「お兄ちゃん!!」

その声もまた涙に濡れていた……………。

e p 7 ・再会（後書き）

なかなか話しが前に進まないなあ……難しいです。

飛び込んできた妹……春奈……は、ボクの体に抱きついて顔をシーツにうずめる。

「は、……春奈？」

ちよつと慌てて、変な声を上げるボク……やっぱ、声の調子……オカシイかな？

ボクは、まだ自由のたいしてきかない体なのでどうすることも出来ない。

頭をなでてやりたいのだけど……。

そんなボクの様子に気付き、春奈はボクの手をとってやさしく包み込んだ……暖かいな。

「お兄ちゃん……」

ボクのほうを見てくる、……やっぱ涙目だ。

「春奈……し、心配かけてごめんね？」

「よかった……、よかったよう……、うえーん!!」

再び、抱きついてきた。

とうとう感情のダムは決壊したみたい……、思いっきり泣きだしちゃった。

「春奈……………」

ボクは、外に出ていた手をにらみながら力をこめ、妹の頭まで運びきり……なんとかなでる動きをした。

たかだか30cmくらいの距離だったけど一日分の力を使った気がした……、それにしても白くて細い、華奢な手になっちゃったなあ……………。

春奈はそれに気付き、泣いていた顔を上にあげ……ニツコリと、笑顔になって喜んだ。

「これからはまた一緒に過ごせるね」

まだ病院からは出られないけど……と苦笑いしながら春奈に言う。

「うん！今までの分も取り返さなきゃね！」

明るくかわいい笑顔を見せる春奈に、ボクの顔も自然と笑顔が出るようになってきた気がする。

それにしても春奈、1年半近く？ぶりのせいなんだろうか？
なんだかずいぶん大きくなったような……、さっき見たときも微妙に大人びて見えた気はするけど……。

そばでこうして抱きつかれたりしていると何か違う気がする？

なんなんだろう……、この違和感。

笑顔から一転し考えこみ出したボクの表情を見て、春奈は一瞬はっ”とした表情になって、そしてお母さんを見た。

お母さんは、春奈を見てうなずくとボクの方に近づいてきた……………。

春奈はボクをちらつと見てから、そばに来たお母さんにちょっと不安げにすがりついた。

ボクは何かいやな感じがしてきた……。

お母さんは、ベッドの横のイスに腰をかけるとボクの手をとり……

……

「蒼空……、落ち着いて聞いて欲しいことがあるの。……大事なお話よ」

と言い……続けて、

「蒼空も目が覚めて、2日目。体のほうはまだまだこれからだけど、それでも気分はだいぶ落ち着いてきたみたいよね？」

「う、……うん」

そういえば、昨日あれだけしてた頭痛も今日はほとんど気にならない……。

「だけどね、お母さんね——まだ、蒼空に伝えていない大事なことがあるの……」

真剣な表情のお母さん。

………なんだかこの先、聞くのがこわい。

「聞いてくれる？」

「うん……」

ボクがうなずくと、お母さんは話はじめた。

「蒼空……、あなたは1年5ヶ月前の事故で、手の施しようのない……もう助からないほどの重症だったの……」

「えっ」

「それで助かるためにはその体を……、蒼空の体をあきらめるしかないくらいだったの……」

「で、でも……ボク」

自分の体を目が覚めてから初めて見ようとする……………。

そんなボクにかまわず話を続けるお母さん。

「それでその時の医師から出された治療案は……………」
「そうだった時のお母さんの表情はすごく悔しそう……悲しそうな表情……………」。

「蒼空の……蒼空のアタマ、脳を、別の体に移植するってことだったの……」

聞いていて、わけが解らなくなってきたボク。

「え？……い、移植う？……別の体って……でもこの体……、ええっ？」

「落ち着いて、蒼空！……………落ち着いて」
そういつてボクの手をギュッと握るお母さん。
そしてボクの頭をなでつつ、再び話しを続ける……………。

少し後ろで、春奈と看護師の西森さんも、つらそうな表情を浮かべながら聞いている。

ボクの口のなかはカラカラだった。

「選択肢はなかったの……………、そして蒼空、あなたの意思を確認することもちろん出来るはずもなく……………」

こう話すお母さんはほんとに辛そうな顔をしている……………。

「昨日、石渡先生がいった手術というのは、その手術のことだったの……………」

「手術……………、脳移植って手術はね。まだ世界でも例のない大変なものだったようなんだけど……………、一縷^{いちろ}の望みをかけて——手術に同意したの……………」

お母さんは一呼吸おき、更に続けた。

「手術は無事成功したわ……………。でも蒼空……………、あなたの意識が戻ることは一度もなかったの」

お母さんはとうとう涙声になり……………。

「その時は、どれほど手術に……………手術に同意したことを後悔したか……………」

「ごめんね……………蒼空、ごめんね……………勝手にそんなことをしてしまっ

て……」

ボクの手をとりそつと頬ずりをする。

お母さんの顔からは涙が止め処もなく流れてる。

そんなお母さんを見ながら……

ボクは……さっきからの違和感はそのせいだったのかと、案外落ち着き出してぼんやり考えていた。

それに結局生きてここにいるわけだし……。

でもそんな落ち着きも、次の一言でくずれさった。

「そ、それでね……、蒼空の体はね……」

「うん？……」

「お……、女の子になっちゃったの……」

お母さんのその爆弾発言に、ボクは耳を疑った。

「え、ええー！！」

出た声は目覚めてから一番大きい……、しかも可愛らしい女の子の声だった。

e p 8 ・動転（後書き）

脳移植はまだ実際には成功してないようです。

あくまでお話してことでよろしく願います（笑）

でも動物実験では成功って話しも……すぐ死んじゃうようですが。

でも人体実験……どうかでやられてるのかも？

こわっ

e p 9 ・決心

その声の高さ、かわいい？声に自分でもびっくりしつつ、まだ信じられないって声を出すボク。

「おっ……おんな……の……こっ………て？」

「え……えええ？」

聞いたことにまだ現実味がわいて来ないボク……。

自分の体を、見て…触って確認したい気持ちにかられたけど、まだうまく体が動かせない自分ではそれかなわない……無力だ。

それでもなんとか顔をなでるくらい……は出来た………けど顔触ってもよくわからなかった。

そうしてる間に看護師の西森さんが何か持ってきて、それをお母さんに渡す……。

「蒼空……これを見て？」

お母さんが見せてくれたのはちよつと大きめの鏡………。
そしてイスから立ちあがり、ベッドに腰かけてボクの見やすい位置に鏡を掲げてくれた。

ボクは恐る恐る鏡を見る………。

そこには、真っ白な髪が肩近くまで伸び、顔色は病的………ってい

うほど青白く……そしてその鏡を見つめている目はウサギのように真っ赤……な、少女の顔が映っていた。

「こ、これ……が、ボク？」

女の子っただけでもビックリするのに—— 白い髪に赤い目だなんて……しかもよく見るとまつ毛まで白い……、これっていったい！？

そ、それに写ってる顔つき……とてももつじき15才になるうかつて年の子の顔じゃない！ どうみても小学生だ……。

でも顔つき……は、なんとなくその頃のボクに似てるような気がする……けど。

しばし呆然と……鏡を見つめ続けているボク。
心の中はもうぐちゃぐちゃだ……。

……やっぱ、体も女の子？なんだろうか……自身の感覚を澄ましてみるけど、まだよくわかんない。

そんなボクを、みんなは押し黙って……ボクの気が済むまで……という風に見てくれている。

どれだけの時間がたったのだろう……（たぶんそう大した時間じゃないかも）

「お母さ……ん……」

ボクは思わず心細げな声をあげてしまった。

お母さんはたまらずボクを見つめ……そしてやさしく抱きしめてくれた…………。

「蒼空、蒼空ちゃん……」

やさしく声をかけてくるお母さん。

「心配しなくていいから……、どんな顔、どんな姿になっても蒼空は蒼空なんだから……ね」

そっぴいながらボクのアタマをなでてくれる。

…………気持ちいいなあ…………。

目覚めてからっていうもの、すごく甘えんぼになった気がする……もっ年頃の男の子だったというのに。

でも、いいよね……今は甘えてしまっても…………（それに外見は女の子……なんだし——）

このままずっとこうしていたい気もするけど…………。まだ疑問に思うことがあるんだよね…………。

「お母さん？」

「なあに？蒼空…………」

「さっきのお話の中で、わからないことが…………あるんだ……けど？…………」

お母さんの表情がこわばる…………。
「な、何…………かしら？」

「あの……、ボクのこのカラダ……は、誰のモノなの？ ううん、誰のモノだったの？」

そうなのだ、この体は誰のモノなの？

この女の子は誰なの？

脳移植？するには、移植するための体が必要なのに――、そんなにうまくその体って見つかるものなの？

この女の子はどうなっちゃたの？

……もし、ボクのために女の子が……。

……。

お母さんはボクの質問に、言葉を失ったように無言になってしまった……。

後ろの二人、春奈と西森さんも表情を失ったようにして立ち尽くしている。

「そ、蒼空……」

お母さんがポツリと言う。

「そ、その話しはお母さんも詳しくなくて……ね」
すぐく言いにくそうに話すお母さん……なんかつらそう。

「でもね……蒼空、あなたはもしかして自分のせいで誰かが犠牲になった？…と、考えているのかもしれないけど…ね、そんなことだけは絶対ないから！」

「この話しはまた…ね、もっと落ち着いてから……詳しい人……に、キチンと説明してもらおうようにするから……」

お母さんは、つらそうな顔をして、それでもボクに心配せさないよう一生懸命話してくれている。

そう……………。

お母さんも、ボクが目を覚ますまでいっぱいいっぱい苦勞して、悲しい思いをしてきたはずなんだ……………。

妹の春奈もそうなんだろう……………。

ボクはお母さんを――、家族を、困らせたくないでない。

「うん、わかった!」

ボクはなるべく軽く、明るく聞こえるよう答えた。

「あ、ボク、女の子になれるようがんばるよ!? お母さん……………、それに春奈も協力してくれるよね?」

そんなボクの様子にお母さんはちょっと呆けてる……………、意外……………な展開? なんだろう……………ふふ。

正直、ボク自身まだイマイチ実感もわかないし、これからどうなるのかもわからない……………。

そんな先のことを考えても今はしょうがない。

まずは動けるようにならなきゃ、歩けるようにならなきゃ、迷惑ばっかかけるのはいやだ!

これは元男の子のプライドだ!

「蒼空！」

そう言うと、お母さんが ”ぎゅっ” と抱きしめてきた。

ボクは抱き返せないの代わりに頬をお母さんの頭によせた。
自然と涙が出てきた。

お母さんも泣いてるみたい。

春奈と西森さんも泣いてる……………。

今日はゴハン…………、食べられるのかな？
そんな中、へんなこと考えてるボクだった。

e p 9 決心（後書き）

ゴハン……は無理でしょう（笑）

ep10・兆し

あれから10日ほどたち……………。

今は、上半身の力をつけるためガンバってる。

外はもう8月も半ばになるところで……………まだもうしばらくは暑さは続くのだろう……………。

妹の春奈は毎日ボクの様子（面倒）を見に、病院に通って来てくれている。

今は夏休みだから学校の心配はいらないから……………と言って、毎日来なくていい……………っていうボクのコトバは軽く流され、相手にされない。

友達とも遊びたいだろうに――。

ボクのことは香織さんが見てくれているんだから無理しなくても大丈夫なのになあ。

彼氏とかいないのかな？ 春奈はかわいいんだから中学で男の子が放っておくはずないんだ……………。

お母さんは、さすがに仕事があって毎日はいらない……………平日は夜、週末のみ朝からって感じた。

「お姉ちゃん！」

「お姉ちゃん！ 聞いている？」

「えっ？ ぼ、ボク？」

「そう、お姉ちゃん！ 私がここで呼ぶのはお姉ちゃんしかないんじゃない？」

「あ……そ、そうだね……」、「ごめん……えへへ……」

「もお！ いいかげん慣れてもいいんじゃないかなあ？ それともやっぱ見た目に合わせて私がお姉ちゃんってことにしましょうかあ……？」

と、途中から”からかう”ように言う春奈。

「そ、それはちょっと勘弁してよお！ ね、これからはホント気をつけるから！？ さっきはちょっと考えごとしてただけなんだ」
話し声だけ聞いてたら（まあ実際は外見もそうなんだけど……）間違いなく春奈の言ってることが正論になってしまっから始末に負えない……年上ぶっても出てくる声は小さい女の子の、かわいい声なんだから。

春奈、そしてお母さんもボクのことはもう「お姉ちゃん」って呼ぶことにしている。

病院の……事情を知ってる人にもそのように話してる。

外見が女の子なのにいつまでも「お兄ちゃん」ではあまりにも変だ。（ホントはお姉ちゃんっていうのにも相当な違和感があるわけなんだけど……春奈に妹扱いされるのだけは、ぜったい却下だ！）

ボクの名前については、この病院に入っすぐ話しはついてるらしくって「蒼空」のままだ。

女の子でもある名前だし、無理して変える必要もないよね……ボクも変わってなくて良かったと思う、13年間使ってきた名前だし

けっこう気に入ってるんだ。

「お・ね・え・ちゃん!？」

「は、はい!！」

し、しまった、また考えごととしてしまった……………。

「な、なに？」

「さつきから話しが進まなあゝい!！」

春奈が頬を膨らましてふてる……………かわいいな。

「今日は、やつとあれ……………とってもらえるんでしょう？」
「といってニヤリとする春奈。」

「う! 知ってたんだ? 春奈」

「知ってますよお……………お姉ちゃんのことならなんだって」
「何それ?……………いやすぎなんですけど……………」。

「香織さんとはもうすっかりお友達なんだからあゝ」

「か、かおり……………さん……………看護師さんには守秘義務はないんですかあ?……………身内はスルーですか?」

「やっぱ、ないんだよね……………はあ。」

「でも、よかったね? これで病院の中だけでも動けるようになれるし、ようやくリハビリも本格的に出来るようになるね!」

「う、うん！ そうだね、ありがとう」

春奈が言ってるのは、は…恥ずかしながらカテールのことです…
…点滴はすでに1週間前に外してもらって、軽いスープとかゲル食を食べるようになってただけど、その…おしっこのほうは上半身がある程度しつかりするまでは、大変ってことで…。

もう勘弁してください！ ハズカシイ。

動くのが大変だった上半身も、毎日体を起こしてもらい…軽い動きを繰り返させてもらうことでずいぶんマシになってきて、上半身くらいなら自分で起こせるようになってきてる。

もちろんサポートは、お母さんに春奈、香織さん…、感謝してもしきれない。

石渡先生にもいろんな検査をいっぱいされたけど、結果は問題無い？のか特に何にもいってこない。

まあ、元々目が覚めないだけで体自体には何の問題もなかったみたいだし。

代わりに病室に來ると、変なことを言って帰ってく——、よくわからない人だ。

「ああ、早く外に出てみたいなあ……」

ついそんな想いを口にしてしまうボク。

「お姉ちゃんったら……氣い早すぎ！ まだこれからリハビリだっていうのに……もう」

「それに初めて出るのがこんな真夏の……強い光が照りつける中じ

「や……………」

そう言ってちよつと心配げな顔をボクに向ける。

「う…………ん、そうだけどさ……………」

しょぼくれるボク。

でもめげずに、

「じゃあさ、朝とか夕方とかさ、日差しの弱いときなら大丈夫だよ……………ね？」

「う…………ん……………どうなんだろう？……………」

お、悩んでる悩んでる？ もう一押しかな♪

春奈もホントは一緒に外を歩きたい（ボクは車イスだろうけど）
と思ってるから、悩んでるんだろう……………。

「大丈夫だよ……………そんな……………」

ともう一押ししようと言いかけたところに……………

「あら、春奈ちゃん……………今日も早くからごろうさま！ お姉さん
想いのいい娘ちゃんネ」

香織さん……………看護師の西森さん登場。

「もう、香織さん子供扱いするう」

春奈がふてる。（そんなこと言うのはやっぱ子供だと思っ……………）

軽く笑顔で、あつさりスルーし、

「聞こえてきたわよお？ 蒼空ちゃん、お外に出たいの？」

「でも、まだダメよお……………もうちよつとガマンして欲しいなあ」

すらつとしたスタイルの、程良くびれの腰に手をあてて、そのキレイな顔でかわいく睨む。

そして、ここからちよつと真剣になる。

「先生からお話があつたでしょう、蒼空ちゃんのその体のこと……お日さまの光を直接浴びるのは体にも、なにより目にもすごく良くないの」

諭すように話す香織さん。

「それに体自身もまだ免疫力が付いてないから外の悪いウイルスなんかにすぐ侵されちゃうでしょう？」

「ん？」

最後に問いかけるようにボクを見る香織さん。

「はあい……」

あきらめて返事するボク。

そう……ボクの体って、お日さまの光——、紫外線に弱いみたい。白い髪に赤い目、白い肌は、“先天性白皮症” といって体の中のメラニン？ って色素が欠乏してしまっているためそう見えるらしい。

だからお日さまに当たると、ひどい日焼けや目を傷めちゃったりするから十分な対策をしなければいけないみたい。

おかげでボクの病室の窓もずっとカーテンが引かれたままで、明るいうちは外も見れない。

免疫力も、ずっと寝たきりだったせいもありすごく弱くて……ちよつとした風邪でも大変なんだって。

命あつてのこととはいえ……………悲しいなあ。

しょんぼりしてしまったボクのアタマをなでながら香織さんが言う。

「大丈夫、これからずっと出るなって言ってるわけじゃないのよ？ それについては私たちにまかせて？　ね？」

そう言いながら最後にぼんってボクのアタマを軽くたたくと、

「さて、それでは今日はお待ちかねのお……………」
と言っていたずらっぱく笑う香織さん。

それを見てこちらはニヤリと露骨に笑う春奈。

ボクは恥ずかしくてたまらない……………のだけど多勢に無勢。
思わずこう言ってしまった……………。

「や、やさしくしてね……………」

ep10・兆し（後書き）

回復のペースは実際とは違うと思いますし、色々な病状・表現についてもシロウトの想像です。

物語ということでその辺はご勘弁いただけたらうれしいです……はい。

……………その日は3月も2週目に入ったというのに寒い日だった。

お昼すぎから降りだしていた雨は、夕方前には雪に変わり辺りは薄い白に覆われたしていた。

ボクたち兄妹は、その季節外れの光景に大いにはしゃいでた。

晩ごはんは久しぶりに家族4人で食べに行くことになったからなおさらだ。

お父さんは、有名な製薬会社でコンピューター関係のお仕事をし
てるらしいんだけど、いつも忙しくてなかなか一緒に出かけること
が出来ない。

今日もホントは仕事だったみたいなんだけど、なにかの手違い？
で仕事に使う荷物が届かなくなった——とかで急遽出なくてよく
なったみたい。

……だから今日みたいな日は、春奈と一緒にたつたついはし
やいでしまうのだ！

ボクももう中学2年になるんだからもっと落ちつかないけな
いんだけどな。

春奈にもしめしがつかない……お兄ちゃんの威厳をみせなきゃ！

「雪……ずいぶん降ってきたようだけど大丈夫かしら？」

みんなで出かける準備をしている最中、お母さんがリビングの窓
から外の様子を伺い言う。

ボクらは、え〜！大丈夫っ全然平気だよ〜 とお母さんにまくし立てていると……

「まあこのくらい大丈夫さ、車は4WDだしまだ冬用のタイヤが付いたままだしね」

と、お父さんが頼もしい返事をお母さんにした。

「「そうそう、大丈夫、大丈夫だよ〜！」」

ボクたちは、ここぞとばかりにまた大丈夫のコトバを繰り返す。

「はいはい、そうよねえ……そうだよねえ……わかりました。じゃ、行きましょ〜かあ〜……うふふっ」

お母さんは、あんなことをいいながらもやめる気は全然なかったみたいで、もう準備はバッチリみたい……お母さん子供ですかっ。

「「わ〜い、出発、出発っ！」」

ボクたちは嬉々としてお父さんの車に乗りこみ、郊外にあるファミリーレストランに向け家を出た。

運転はモチロンお父さん、その横にはボク。お父さんの後ろにはお母さんが座り、春奈はその横……ボクの後ろって感じた。

「お父さん、ボクはチーズ入りのハンバーグがいい」

「私はスパゲッティ〜！ でえ、イチゴのショートケーキ、それにプリン！あえっと、えっと……」

「えええ春奈、ごはん食べる前からもうデザートの話なのお？
しかもデザートが多いじゃん！」

「お兄ちゃん、ウルサイ！ 今日はずっとお父さんも一緒なんだ
からお食事もフルコースなの！」

「何なのそれ、わけわかんないよお？」

車の中はボクたちの声で騒々しい限りだ。

「まあ、まあ、二人ともケンカしない・・・なんでも好きなモノを
頼めばいいさ？ 今日はお父さんにドンとまかせなさい！」
えへんといった感じで胸を張るお父さん。

はい と答えるボクたち。

それを見て微笑むお母さん。

背が高くてかつこよくて、いつも優しいお父さん。
お父さんの横でいつも微笑んでるお母さん。

そんなお父さんやお母さんに甘える兄妹。
ボクたち

あの日、雪がもつと強く降っていたら。

お父さんの仕事が急にキャンセルにならなければ。

いつものように家でごはんを食べていたら……

結果は違ってたのかな？

* * * * *

それは唐突なできごと……………。

……………

ボクたちの乗る車の前方から、雪でスリップしたワンボックスが
対向車線から飛び出してきて……………

……………

……………

……………

気が付くとボクは、車の外に投げ出されていた……………
目の前は半分真っ赤で…………… 体の感覚は…………… 全然…………… ない。

顔を横に倒す…と、お父さんの車の前半分…………… は、ワンボックス
がはまり込んだようになって止まってた——。

クルマの中から春奈の泣いてる声……が、聞こえる……良かった
……春奈は無事なんだ？

……お母さんは大丈夫かな？

ボクの頬つぺたの周り……なま暖かい液体がたまってきた……
……。

目がかすんで……きちゃ……った。

ボ……ク……死……ぬのか、……な？

……

「おと……う……さん……」

……

雪がすべてを覆い隠すように……激しく降り出していた……

それでも赤い色は隠されることもなく広がっていった。

* * * *

.....

「.....蒼空！」

.....うん.....？

「.....蒼空ちゃん？」

.....

「うう.....うん？」

「蒼空ちゃん？ 起きて！？」

お母さんが心配そうにベッドで眠る蒼空に呼びかけていた。

「んあ？ お、おか.....あ.....さん？」

呼びかけられて目が覚めてきたボク。

「蒼空！？ 大丈夫？」

心配そうに声をかけてくるお母さん。

どうやらボクは、リハビリに疲れていつの間にか眠っちゃったみたいだ。

「お母さん？ どうしたの？」

「どうしたのじゃないわ・・・蒼空、あなた眠りながら泣いてたわ・・・」

そ、そうなんだ。

頬に手を当てると涙でまだ湿ってた・・・目じりにもいっぱい溜まってる。

「怖い夢でも見た？ ん？」

優しく問いかけてくるお母さん。

ボクが、さっきまで見ていた――、生々しい夢。

……つい最近まで忘れていた、いや……忘れようとしていたのかもしれない……出来事……。

思い出してしまった……………。

おとう……………さん。

あえて口に出さなかった……………、聞きたくなかったのかもしれない。

みんなもそのこと何にも言わなかった……………。

「蒼空？」

ボクの目からはまた涙が出てきていた。

「蒼空・・・？」

お母さんはそんなボクを見て、だんだん心配になってきたのか…
…ボクの頬をやさしくなでる。

「お母さん……………」

「なあに？」

「…………お父さん……………」

「…！」

「もう、いない…………んだ…ね……………」

「会えない…んだ…………よ…ね……………」

ボクは、自分に言い聞かせるように言って…………

そんなボクをお母さんは抱き寄せて…………

ボクに頼ずりをしながら……、一緒に泣いていた……。

e p 1 2 ・ 発端（前書き）

しばらく”うつ”展開かも……

ep12・発端

とある山麓の研究学園都市の一角——、篠原製薬の広大な敷地内にある再生医療研究所。

* * * * *

蒼空の父親、柚月 まさゆき 雅行はその研究所の情報システム部門システムエンジニアとして従事しており、母親の 結城 日向 はそこへコンピューター関連のオペレーターとして派遣されていた。

二人は同じ職場で働く仲間として知り合い、友人となり、いつしか恋人に……お互い無くてはならない存在となり……そして結婚したのだった。

結婚当時、雅行が26才……そして日向は22才であり、まだまだ若く未熟な部分もあったにせよ二人して力をあわせ、幸せをかみしめながら日々を楽しく暮らしていた。

………結婚して1年ほどたち新しい生活にもなれた頃、日向はうれしい知らせを雅行に伝える。

赤ちゃんを授かった……そう伝えると雅行は精悍でありながらもやさしい顔をクシャリとゆがめ、大いに喜んだのだった。

そして14年前の10月——、かわいらしい男の子……蒼空は生まれた。

蒼空を生んでしばらくの間は、育児休暇をとり育児に専念した日

向だったが、育児休暇の終了とともに職場へ復帰。

その後の蒼空の世話は、日向や雅行の母親（蒼空の祖母）に見てもらっていたのだが、日向に二人目の娘、春奈が生まれたためまたもや育児休暇をとることとなり、嬉しいやら忙しいやら……なんとも微笑ましいことこの上なかった。

そんな中、蒼空が3才になろうとした頃、研究所内の福利厚生に力を入れるとの副所長の施策で”保育施設”が設けられることとなり……柚月親子は渡りに船とばかりにその恩恵に預かることになったのだった……。

思えばそこから柚月夫妻――、そして蒼空の悲しい運命は始まったのだろう。

篠原製薬再生医療研究所の副所長……篠原 征二^{せいじ}、そして彼の率いる先鋭的な一部の研究者らによる、ある企てによって……。

* * * * *

研究所内のある一室で、スクリーンに投影されているデータを興味深げに見る研究者たち……。

その中で、30代前半に見える、痩せぎすの男がそのスクリーンのデータを指し示しながら報告をしている。

「……保育施……のおかげ……」素体”のベース……細胞の入手が……非常に……となり……。

……所内の健康管理センター内においても同様に……

サンプル提供者との近親者がいることも非常に……であり……ですが……

……により、素体の成長は順調であり……で……といったところ……です」

と発した言葉と同時にある映像が、スクリーンに映しだされる。

それを見た一堂から静かな歓声上がる。

「おお……スバラシイね！」

そこに写っていたのは、浅めの透明な水槽の中で人工の羊水に浸かり、いくつかのチューブに繋がれた状態の……人間の”胎児”であった。

……その水槽は、7つ——写っていた。

もはやこの集団に、正常な倫理感に基づく思考は存在しえないのかもしれない……。

最後に言葉を放ったのは、副所長である篠原征二であり……”篠

原製薬社長” 篠原 正剛せいこうの息子である。

彼は、元”国立医療研究中央病院”の脳神経外科の”一流”と呼ばれる医師であつたのだが、普段からの言動……そして、やはりその倫理感が問題となり病院を追われたのだった。

しかし、父親の庇護のもと、35才の若さでこの研究所の副所長にまんまと納まっていた。

ちなみに所長は、社長である正剛が兼務しており、彼は事実上の最高権力者といっても過言ではなかった。

彼の周囲を固めているのは、そんな彼に付き従つて病院をやめてきたもの、あるいは同じ研究を行う同志として（彼が利用できると思つて）、倫理にもとる行為にもかかわらず行動を共にするものたちである。

本来の再生医療研究からかけはなれて、犯罪行為といえるところまで行っているにもかかわらず、権力を使い隠蔽し露見させない・どこるか更なる暴挙に出ようとしている彼ら……。

社長であり父親の、正剛——は、そのことについて、息子のその・・・所業について、きつちり把握することが出来ているのであらうか？

あるいは正剛もまた……？

彼らの行為はこれから更に……悪い方へと、深みへと、沈み込んでいく……………。

e p 1 2 ・ 発端（後書き）

ごまかし多くてすみません……なにぶん知識ないもので……

しかし、やっとあらすじの話が………

ep13・狂気

それらは、篠原らが無作為に選んだ”サンプル” 提供者……より採取した組織によって生み出された……。

その組織から作成された人工多能性幹細胞（IPS細胞）……を元に作られた、彼らが”素体”と呼ぶ哀れで悲しい……子ら。

彼らのゆがんだ探究心は、今だ実現されていない（表向き、ではあるが）とされる、ヒトIPS細胞からの子供の誕生を現実のものにしようとしていた。

彼らはまた、誕生させるだけでは飽き足らないとばかりに、作り出された受精卵に更に遺伝子操作を加え、それにより知力・体力を向上させる—— 技術、をも樹立させようとやっきになって操作、調整を進めていた。

しかし、その技術はとても完成したものとは言えず、その代償は”素体”へと押し付けられていく。

* * * * *

この悪魔の所業が始められてからすでに10年以上の時が過ぎ去っている……。

7体あった”素体”のうち1体は遺伝子操作の失敗——、2体は生きることを拒んだように死を選び、残りは4体となっていた。

また篠原らの集団も、当初いた9人から1人、2人と抜けて行き……残っているのは3人のみとなつてた。

ここにいたつてもまだ成功と呼べる結果が出ていない。

”素体”……は、そのかかった年月通り成長は進んでおり、その年齢は世の中で普通に生まれ……成長していれば11才の誕生日を迎えようとしているはず……の子らであつたはずだ。

しかし、その年月を経てもそれら”素体”は生命活動はしているものの、その体に意識が宿ることは無く、ただの一言の声を出すこともなかった。

目や口を開くこと——はあつてもそれは意識的なものでも、なんでもなく……ただ生命活動のなかでの反射的な動き？といつていいのか、その動きでしかなかった。

そんな篠原らをあざ笑うかのような現実は、犠牲になつた子らのせめてもの反抗といえるのだろうか。

「なぜ目覚めない！」

篠原は、ここまで来ておきながら、解決の糸口さえつかめない状況、無駄に時間のみが過ぎていく焦燥感……により本来の目的からずれた、危険な思想にとらわれるようになってきていた。

すなわち——”素体”が目覚めない、の解決を”素体”自体への処置や調整、治療？により行うのではなく……。

目覚めないのであれば、すでに活動していた脳……生きて生活していた同じような年齢の子供の——脳髄を使えば！すべて解決すると……………。

そういう結論に行き着いてしまったのである。

やはり、彼……彼らは、狂っていたのであろう……………。

* * * * *

篠原は、“生きた脳”を入手するため——非道な計画を画策しだす。

“素体”の遺伝子^{サンプル}提供者（提供者というのもおかしなものだが）……は全てわかっている。

そのため、脳の挿げ替え時の相性の心配は不要といえる。なにしろ本人の細胞、遺伝子から造られたある意味、一卵性双生児よりも近い——と、呼べる存在なのだから。

脳移植自体も相当な難易度であるはずだが、篠原はそれには自信があつた。

“国立医療研究中央病院”の脳神経外科の一流の医師であつた自分への自惚れともとれるほどの自信が。

設備も研究所内に、権力にあかせて作っており、またサポートに

は彼の、残り少なくなつたとはいえ同志がいる……………。

「……………それに”素体”自体の予備は多めに揃つてゐる……………」

篠原は、そんな悪魔のような眩きをこぼす……………。

そうして計画は、秘密裡に……そして確実に、実行へと移されようとしていた。

時はある年の3月……………

その日は、昼からの雨が雪に変わっていった……………寒い日。

残る4体、その内の2体こそ……………柚月夫妻の子供たち、”蒼空”
と”春奈”をサンプル提供者とする”素体”であつた。

e p 1 3 ・ 狂気（後書き）

話しが、暗い……

次で暗い話しは終わりにしたい。

ep14・暗転（前書き）

サブタイ変更。

篠原の立てた計画は、凝ったものでもなんでもなく単純であった。提供者をなんらかの手段で脳移植をするしかない状況に追い込み、”素体”への移植を行う。それだけのこと。

篠原は、手っ取り早く交通事故という手段を用い、事故患者として遺伝子提供者を研究所に引き込もうと目論んだ。

その日……………。

一人目は失敗だった。

派手にやりすぎてしまい、提供者を死亡させてしまった。乗っていた車が軽自動車だったことも災いした。

——次はうまくいくといいのだが。

そして次のターゲットとして選ばれたのが……………、柚月 蒼空、そして春奈の兄妹。

篠原は研究所のSEである蒼空の父、雅行が休日出勤して片付けようとした業務に横やりを入れ、仕事を無くし自宅にいるよう仕向けた。

雅行が休日にある場合、子供たちを連れて外食に行くことが

多いことも、どこに食事に行くことが多いか……も調査済みであった。

それでもこの日、外出に出るかは賭けだったが、ダメならまた別の手を使えばいいだけのことなのだ。

結果、まんまと図に当たった。

篠原は金でやとった男達に、雅行の運転する車へと衝突事故を起こすよう、今日二度目の指示を出した。

子供たち（どちらかといえば妹の方が良い……兄のほうの”素体”は遺伝子操作のミスで性別が違い、更にアルビノ化してしまっていた）に、瀕死の重傷……極論……脳さえ無事ならいい……を負わせ、後は救急車を装って現場へ行き、子供を回収……研究所に搬送し移植手術を行う段取りであった。

事故を起こす車は盗難車であろうし、その辺りは実行犯である男達……は、その道のプロなのだから篠原が心配することもなく、うまくやってくれるはずだ。（一度目は失敗してはいるが……）

男達は、今度はうまくやった。

父親を死なせてしまうヘマはやったものの、子供の方は完璧だ。妹の方でなかったのは残念だが、まあ大した問題でもない。

兄の方、蒼空といったか？ は、体のほうはもうダメだな、半分

逝つてる……これを見せれば母親への手術（脳移植）の理由としては最適だろうさ。

救急車を装つたため、母親と……娘まで付いてきてしまった——が、どこに入るかは見せていないし（救急車は外はみえにくい上に、見る余裕もなかったろう）、かえって説明の手間が省けたともいえる。

あとは移植手術をするだけだ……………。

* * * * *

研究所の手術用に準備した部屋——。

篠原は、そこに母親と娘を案内した。

……………運び込んだ蒼空と ”素体” についてはサポートメンバー（篠原の同志たち）に任せて、準備を進めさせた。

母親にはこの際、事実を伝えてやる——、やらなきゃ死ぬんだから了承せざる得まいさ。

もっとも、今この状態でまともな判断が出来るかはなはだ疑問ではあるが……な。

母親を見ると、ここまで搬送されシートを被せられた父親の遺体の横で放心状態に陥っていた。

娘の方は、事故のショックと……泣き疲れてしまったのか、ベン

チシートで寝てしまっていたため面倒がなくていい。

父親（すでに死亡確認済みだが……）が寝かされた台の横で脳移植の話をした。

余計判断力が鈍るだろうさ……息子にまで死なれなくなろう。

とにかく脳移植すれば助かる……との説明と、

ドナーとなる体があり、それはかねてから成長させてきた「蒼空」君そのもの……と、言っているいい体であってこれ以上に相性のいい、脳移植に適した体は存在しない……と説明した。

ドナーについての説明で、母親は顔色を失いながらこちらを見やり、非難する視線をあびせてきたが、今はそれしか助かる方法はない、（移植を）やらねば死ぬ、それでもいいのか？と、強く出てやると……そもそもこの状況、心身共に疲弊した状況で正常な判断が出来ようはずもなく……半ば強引に同意を得ることに成功し、書類にもサインをさせた。

（実効力のあるものでもないのであるが、サインしたと思わせることに意味がある）

まあ実際のところ、同意があってもなくても手術はするが、得ておいて損はない。

そして蒼空の脳髓を……蒼空の”素体”へと移植する手術は実行され……

……見事成功した。

* * * * *

蒼空の母親……日向と、妹の春奈はあの日から研究所内の隔離棟にある一室で蒼空の様子を見ていた。

蒼空の頭には痛々しく包帯が巻かれていて、そこからはチューブが出て横に設置されている機器に入っている。酸素吸入もされ、体にも数本のチューブが繋がっていて、それで体力を維持させているのだろう。

父親の雅行を茶毘に付し（篠原が付けた、付き添いという名の監視と一緒に）母娘だけでお別れはしたものの、葬儀は出来ないまま軟禁状態に近い扱いをうけていた。

学校へは連絡を入れさせられた。
交通事故のことを説明し、しばらく休まさせていただきます……と、連絡を入れたため、しばらくは大丈夫なのだろう。

日向は、心身ともにすり減らした状態で顔色も優れず、今にも倒れてしまうのではないかという様子を見せていた。

春奈は、そんなお母さん……そして変わり果ててしまった兄、
蒼空”を見て心を痛める。

蒼空の姿は事故前のものとはかなり違っていた。

背丈は、春奈より小さくなっているし、その体は華奢というよりやせすぎで、その顔色は青白く、血管が透けて見えるようだ。

それに見える限り……の毛髪は、全て白い。

頭には包帯、顔には酸素吸入用のマスクが付けられているため、その様子は伺いにくいのが、表情にはつい数日前までの兄の面影が見え、兄の遺伝子から……っていうのもあながちウソではないのだろうと思えた。

「お兄ちゃん……大丈夫だね？」

そんな蒼空に話しかける春奈。

当然返事はない。

「どうなっちゃうんだろ……私たち……、お父さん……お父さん……おと……う……さん……」

「助けて……」

春奈も限界は近い。

日向は、ぼーっと、どこを見るでもなく無気力に座っていたが、そんな春奈を見てはっと我に返り、そして春奈をやさしくその胸に抱いた。

二人はしばらくそうして抱き合い、涙を流した。

日向は、今になっても現実と向き合うことが怖かった。

雅行が、最愛の夫が突然いなくなった。

死んでしまった……、もう二度と会うことは出来ない。

そして息子の蒼空……………。

事故で大怪我で……………、脳移植をしなければ助からない。
移植をすれば助けられる…………と、言っでドナーまで用意してのけたこの研究所の副所長。

おかしい！

おかしすぎる……………しかもドナーとなった体は、蒼空の体組織、
遺伝子から造った——、などという。

そんなモノいつの間に準備していたのだ！？

目の前にある蒼空の脳を移植された体はどう見ても10才以上に
成長した体だ。

そんな昔から蒼空は、蒼空に使われた体は”奴”の、奴らの、お
もちゃにされていた？

そして今回の事故……………。

偶然？ そんなことはありえない！

しばらくして、ポツリと言う。

「嵌められたんだわ・・・目的が何かはわからないけど……」

「雅行さんは殺されたんだわ——、そして蒼空はこんな目に……」

日向の目から……今は、悔し涙が流れ落ちる。

春奈は胸の中で泣きつかれて眠っていて、母親の言葉は聞こえてはいない……。

そして手術から1週間を経ても、蒼空が目を覚ますことはまだ一度としてなかった……。

* * * * *

しかし、こんなことをしておいて篠原は今後どうするつもりなのか？

いくら篠原製薬社長の息子で、再生医療研究所副所長とはいえ、物には限度というものがあるのではないのか？

更に母親にまでその”素体”のことを知られ……………、どう切り抜けていこうと考えているのか？

* * * * *

……………篠原は実際のところ、この後のことなど何も考えていなかった。

”素体”が目を開き、動きだすことのみを考え、そのこと意外に考えを及ぼすことが出来なくなっていた。

脳移植を発案したとき……………いや、それ以前、狂気に囚われたその時から———。

彼は破滅へ向かって突き進んでいつているよう……………

それは自らが招いた結果。

その時は近い……………。

e p 1 4 ・ 暗 転 (後 書 き)

やっぱ展開に無理ありすぎだなあ……難しすぎだ。

e p 1 5 ・羞恥心

8月も終わりが見えてきた頃……

日々のリハビリは大変だけど、みんなボクのために一生懸命協力してくれている。

ボクもそんなみんなの気持ちに答えられるよう……いや、ボク自身も早く自由に動きまわれるように……。

何よりも懐かしいあの家に……、家族で暮らしていたあの楽しかった家に、早く帰れるよう――。

ガンバって苦しいリハビリを続けてる。

初めは車イスに乗り移るのも、抱えてもらっての移動だったけど、今では自分でベッドの上を這いながら……なんとか車イスへ乗り移ることができるようになった。

車イスを押してくれるのは、主に香織さんだけど春奈が来ているときは（なので夏休み中は、ほぼ春奈がその係りだ）その役は春奈がしてくれてる。

トイレに行くのにも大変だ。

今ではもう食事も、固形物の食事も出されるようになってきた（やっぱり普通のごはん、いいよね）ので早い話……もよおしてきたやうのだ。

その時はもちろん、トイレまで車イスを押していつてもらう（まだ自分で車イスを動かすことはキツイ）んだけど、春奈ったら心配してなかなかボクを一人にしてくれない。

病院のトイレはボクのように体が不自由な人でも使えるよう、考慮されてるんだから大丈夫って言ってもダメなのだ……。もちろん、ホントはまだまだとってもキツイんだけど……。やっぱ、恥ずかしいよね。

いつもそんな感じで、舌戦を繰り繰り広げつつ最後は出て行ってくれるけど……。いいかげん勘弁して欲しいなあ。

恥ずかしいといえば……今さら？……ながらんだけど――。

この体。

女の子になっちゃったんだよね……………。

目覚めてすぐのころは、そんなこと気にする余裕もなく……。まあ気にしようにも、動くこともままならなかったから仕方ないといえば、そうなんだけど……………。

そんなことから、とまどつことが多々あるのは……。まあ、仕方ないことだよな？

元、男の子……としてはさ。

最初にその違いを実感させられたのは、寝たきりだったボクの体を拭いてもらうとき。

もちろん今までもずっとそうしてもらっていたんだろうけど……今までにはボクに意識はなかったわけで、今回はボクにはバッチリ意識もあるわけで……………。

そのとき体を拭いてくれたのは、いつもホント、お世話になっている香織さん。

春奈はその時は居なかったんだけど、逆に居なくてホッしてるボク。

居たら絶対、私がやる！とかいつて聞かないはずだ・・・、そうだったらボクは恥ずかしくてたまらなかったと思う。

いくら同じ女の子になったからって、この歳で妹にハダ力を見られるのは恥ずかしいし……、っていうかボク自身、自分のハダ力を見るのは初めてだったわけし……………。

”？”……、なんだか自分でも何考えてるんだかわけわかんなくなってきた。

自分の体は、キレイだった。

透けるような白い肌で、うっすらピンク色に染まっていた。

まだまだ、痩せて華奢な体つきだったけど……………目覚めるまではも

つと骨ばって痩せてたらしい……食事をすこしずつでもキツチリと
るようになって、ずいぶんマシになってきたんだって。

胸……は、まだほとんど……ちょっぴり膨らんでる程度、しかな
かった。

香織さんいわく、これから大きくなつてくるから心配いらないわ
よ？って、……別に大きくなりたいなんて言つたわけじゃないのに
……………。

そんなに残念そうな顔してたのかなあ？　ボク。

これからボクも胸が大きくなりたい……とか考えるようになって
やうのかな？

そして大事なところ……には、やっぱり付いてなかった。

まあ、自分の体だから最初のころと違って、しつかり感覚で無い
ことはわかっていたし、体がある程度動くようになってからは、興
味本位でそこに触れてみた………こともあつたけどさ。

でも目で見るとやっぱり、違う……よね……………。

香織さんは、温かいタオルで体を拭いてくれながらも、体に慣れ
ず恥ずかしそうにしてるボクに話しをする。

「蒼空ちゃん、女の子の体はね……………とってもデリケートなの。
だから赤ちゃんの肌を扱うような気持ちで……………大事に、やさしく扱
わなきゃだめなのよ？」

いいながらもやさしく拭いてくれる……、ああ、暖かいタオルが気持ちいいや。

* * * * *

そして今日。

目が覚めてから初めてお風呂に入れてもらえるのだ！

この病院のお風呂はかなり大きくて、10人くらいは余裕で入れるらしい。

でもボクは、立ち上がることはまだまだ難しいのでそっちには入らず、一人で入る浴槽での入浴になるみたいだけど。

入れてくれるのはお母さんと、香織さんだ。

春奈も手伝いたがったけど、歩けないボクをサポートするには春奈じゃ無理だしね。

春奈には悪いけど、ボクもそのほうが安心だし……ハダカ見られるのもやっぱりまだ恥ずかしいし。

「お姉ちゃん、今日はあきらめるけど……いつか、リハビリが進んで歩けるようになったら……一緒にお風呂、入ろうね？ 約束だよ！」

春奈がけなげ？に言う。

そんなこと言われて、恥ずかしいからいや……、なんて言えないし……。

「うん、わかった。約束する」

と答えるしかなかった……………男の子のままだったらそんなこと、この歳でありえないよね。

* * * * *

「蒼空、お風呂の準備、できたようだから入りましょう」
お母さんがそう言いながら、ボクの服を脱がしにかかる。

香織さんは、浴槽の方で準備をしてくれてたようだ。

ハダカになったボクをお母さんが抱きかかえて、香織さんの待つ浴槽へと向かう……………ちよつと恥ずかしい。

でも一人でボクを抱き上げるなんて、お母さんスゴイ！と、変なところで感心してしまうボク。

浴槽は一人で入るのがちょうどいいくらいの小さいもので、家にあるユニットバスよりも狭いくらいだった。

シャワーで体の汚れを流してもらったあと、お母さんと香織さんが二人でゆっくり浴槽に入れてくれる。

いつからお風呂に入ってなかったんだろ……………。

久しぶりのお風呂はホントに気持ちよくなって……………。

「蒼空、どう？ 気持ちいい？」

「うん！」

気持ちいいよっ！とお母さんに満面の笑みで答えるボク。

「蒼空ちゃんに気に入ってもらえて良かったあ！ 準備した甲斐があつたわ」

香織さんもそんなボクを見てうれしそう。

ボクは恥ずかしい……なんて気持ちは、とうの昔にどっかに消え去ってしまったていて、久しぶりのお風呂を心ゆくまで楽しんだ。

「お母さん、香織さん、お風呂入れてくれてありがとう！ とっても気持ちよくなってサイコーな気分だよ」

感謝の気持ちを言葉にした。

二人は目を合わせてニツコリと笑った。

そしてお母さんはボクのアタマをやさしくなでてくれた。

* * * * *

これからは、1週間に1度くらいらしいけどお風呂に入れるようにしてもらえるみたい。

回数が少ないのが残念だけど、楽しみが増えてウレシイ。

お風呂から出てさっぱりした気分で、香織さんに車イスを押してもらい病室に戻ると、春奈が待っていてくれた。

お母さんは携帯に着信があったらしく、確認しに行くため別行動

だ。

気持ちよかった？と聞かれたので、うん！と笑顔で答えた。

それを見て春奈も、よかったね！と喜んでくれた。

ボクはベッドに寝かせてもらい、ゆったりした気分……、春奈はそれ見て笑顔を浮かべる。

香織さんは用があるからと、病室を出て行き……、入れ違いくらいのタイミングでお母さんが戻ってきた。

お母さんと春奈は軽く目を合わせて頷きあっていた……、なんなんだろ？

そしてお母さんがボクに向かって言った。

「蒼空、明日はここにお客さまが来るの」

「お客さま？　ボクに？」

「そうよお、とは言っても蒼空は会ったことない人なんだけどね」

へえ、そうなんだあと言いながらもボクは何しにくるんだろ？と疑問に思っていると。

「その時、お話しもあるから明日のリハビリは無しにしましょうね」

「はい」

疲れてお客さまの相手するのも失礼かな？と思い、ボクもそう答えた。

それにしてもお話しってなんだろう？

……………お母さんと春奈の目配せも気になるし。

お客さまってどんな人なんだろう？ と考えながらも、お風呂に入って心地のよい気分だったこともあり……………いつしか眠りに落ちていった。

e p 1 6 ・ 来 訪 者

今日はお客さまが来るってことで、お母さんがボクの ” おめかし ” をするって言い出した。

ここは病院なんだし、ボクは患者なんだし、患者服のままでいいじゃないって言っても聞いてくれない。

お母さんと春奈は、ずいぶんとその人のお世話になったみたい（ボク自身もお世話になってるらしい…、ボクは当然知らないけど）で、失礼なカツコでは会わせられないって…、ボクの意見は総無視の構えだ。

春奈ももちろんお母さんの味方だから、ボクに勝ち目なんてあるうはずもなく……。

ボクは、生まれて初めて……、す、スカート！ を履くことになった。

元男の子だから、当たり前といえば当たり前だけど、うう、複雑だ……………。

だいたい会うにしても、どうせボクは車イスに乗ってるんだから、わざわざスカート履く意味あるのかなあ？ と、まだブツクサ言っていると、

「お姉ちゃん、いいかげん覚悟きめたら？」

春奈が、にやけ顔でおっしゃる。

「お姉ちゃんは、すっごくかわいい女の子なんだからキレイなお洋

服着ないと、もったいないよ?」

「それに今日来てくれるお客さまも、お姉ちゃんのかわいい姿見たらきつと喜ぶよ!」

春奈め、たて続けにだめ押ししてきたよ。

「じゃ、今日はこれを着てもらうからね」

そう言って、春奈はボクに着せるために買ってきたのであろう、洋服の入った包みを見せる。

「昨日、お母さんと二人でお姉ちゃんのために選んできたんだからね? きつとすごく似合うよ!」

「かわいさ100倍かも?」

ついにそんなことまで言い出す春奈。

更に……、

「ね?」

と言いながら、春奈がお母さんに振る。

「そうよねえ、きつと喜んでくれるわあ」

「それにお母さんも、かわいく着飾った蒼空ちゃん、見てみたいしね」

「……………」

* * * * *

ボクは、お母さんと香織さんに支えてもらいながら春奈の着せ替え人形と化していた。

みんなすごく楽しそう。

かわいい、かわいいって言いながら、ボクはなすがままにされる。

そんな着せ替え人形だったボクの前に、春奈がある物を立てかけた。

「はい、お姉ちゃん！ これ見て？」

それは、全身を見るための姿見だった。

こんなものいったいどこから持ってきたんだろ？ 病院の備品なのかなあ？ と、どうでもいいことを考えつつも鏡を、恐る恐る見てみると……

鏡の中には、上目遣いでこちらを伺う、真っ白な髪に透き通るような白い肌、それにウサギのような赤い目をした、触れれば壊れてしまっんじゃないかと思える、かわいらしい女の子が写っていた。

女の子になつてからの……、全身の姿をこうやって見るのは初めてじゃないだろうか？

ボクは写ってる自分の姿をじっと見つめた。

春奈とお母さんが買ってきてくれたのは、胸元にリボンの付いた淡いピンク色をしたワンピースだった。それに、七部袖のカーデ伊ガンを羽織らせてくれて、足元にはレースのソックス。

（ついでに下着まで買ってきてくれてあったのはどうかと思うけど……すっかり履かされたし）

まだじーっと見つめているボク。

じれてきた春奈が問いかけてくる。

「お姉ちゃん、どう？ 気に入ってくれた？」

はつきり言って……、我ながら……、かわいいって——、思ってしまった。

自分の姿なのに。

「う、うん……、まあ、い、いいんじゃないか……なあ？」

ボクは、顔を……たぶん赤くして、うつむきながら答えた。

「ふーん？」

そう言いながら、春奈はボクの顔を覗き込んで……、見透かすように笑うと——、

「お姉ちゃん？ 思ってることは正直にいった方がいいよお？ すごく気に入りましたって顔してるもん？ ねえ、お母さん？」

「春奈、お姉ちゃんをあんまりからかつちゃダメよ。まだ女の子の姿になれてないんだから……ね」

やっぱりお母さんだ……、春奈とは違うよ、とボクがうれしそうに顔を上げると……

「でも蒼空。ほんとにすごくかわいいわぁ！ 似合ってる、もう

食べちゃいたいくらいに可愛いわあ！」

やっぱり、お母さんも一緒でした。

更に、

「ほんと、すつごくかわいい！　せつかくかわいいのに、ずっと患者服ばかりで、かわいそうだなあ　って思ってたんだけど、こんなに可愛い服着せてもらっちゃって、よかったねえ？　蒼空ちゃん」
香織さんまでそんなことを？　……　ボクに味方はいないようです。

ボクは、（たぶん）耳までまっ赤になったままうつむいて、みんなが飽きるのをじーっと待つしかなかった……。

やれやれだよ。

* * * * *

お客さまを迎えるために、お母さんは談話室を借りることにしてみたい。

談話室はいくつかあるものの、僕たちが貸し切ってしまったて、ちよっと他の患者さんに悪い気がした。

（まだ他の患者さんとお話したことはないけど……）

ボク自身の体調は、元々病气ってわけじゃなかったから、特に問題はない。

とは言ってもいろんな病気に感染しやすいから、うかつに出歩いたりしちゃダメ　っていわれてるけど――、それでもずいぶん体力も付いてきたから、そのうち外に出してもらえるんじゃないかと期待してる。

携帯をしてたらしいお母さんが、病室に入ってきて言う。

「蒼空、お客さまがもう少しで病院に着くみたいだから、談話室に行きましょうね」

「はい」

ボクが答えると、春奈がボクの車イスに寄ってくる。

いつお客さまが来てもいいよう、車イスに座って待機してたのだ。

「春奈、それじゃ談話室までよろしくね！」

「うん、まかせて！」

そのままボクと春奈は、談話室に向かい、お母さんはお客さまを出迎えに1Fのロビーへ向かった。

（ちなみに、病室は3F、談話室は2Fにあるのだ）

看護師の香織さんも、今日のお客さまとは面識があるらしく同席するみたい。先に談話室の準備があるから…と、出ていつてるので今はもういない。

今さらながらどんな人なんだろ？　今から会うお客さまって？　みんな、どんな人なのか聞いても教えてくれないし。

ちょっと不安になってきた――。

そんな気持ちが態度に出ていたのか、春奈が話しかけてきた。

「お姉ちゃん、心配しなくていいよ？ 今から会う人は、すっごく
かつこいい、いい人なんだから！」

春奈は、そう言って車イスを押す力を強めた。

* * * * *

談話室で、ボクと春奈、それに香織さんがそろって間もなく、お
母さんが入ってきた。

お母さんの後ろから、もう一人…お客さまだろう、入ってきた。

ボクは、恐る恐るその人を見ようと、不安でうつむいていた顔を
上げようとしていた矢先に……

「きゃ〜！！ 蒼空ちゃんね〜！」

「か、かわいい〜！！」

そう言うなり、そのお客さまは…ボクに飛びつくように抱きつい
てきた。

ボクはしばらくあっけにとられ、呆然と抱きつかれていたのだっ
た……………。

e p 1 6 ・来訪者（後書き）

ファッション……わかりません。
適当ですすみません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3390y/>

心のゆくえ

2011年11月21日11時21分発行